
僕と君と過去の思い出

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と君と過去の思い出

【Nコード】

N3786U

【作者名】

唐笠

【あらすじ】

明久は夢を見ていた。それは遠い昔の夢。明久と瑞希の幼い頃の夢を。

本作は『僕とみんなと如月グランドパーク』の続きとなっておりますので、そちらを先にお読みいただいた方がいいかと思われます

(前書き)

い 今回は前回以上に作者の妄想が爆発していますので注意してください

夢を見ていた。それは遠い昔の夢。君にとってはなんでもない日でも、僕にとっては一生忘れる事のない大切な日の夢。

雨の降る日、僕は君を探していた。色々な友達に聞いて回ったけど誰も君の居場所を知らなかった。

だけど僕は君を見つけなきゃならなかった。手の中に握ったものを君に渡さなければいけなかったから。今も君が大事にしている、あのものを君に届けなければいけなかったから。

部屋の中をいくら探してもいなかったから傘をさして外に出た。そうしたら、花壇のそばで傘もささずにうずくまっている君がいた。僕は何かを探しているようにキョロキョロしている君に声をかける。

「どうしたの瑞希ちゃん？」

「あつ、明久君。あのね、なくしものしちゃったの」

悲しそうに言う君に少しドキリとする。多分、君の探しているものは僕の手の中にあるものだから。だけど、なぜだか正直に返す気にはなれなかった。今なら、その理由はわかるけど、あの時はわからなかったんだ。

「じゃあ、僕が見つけたいてあげるから瑞希ちゃんは部屋に戻って」

そう言つて傘を渡す。もう片方の手に持っている、君の探し物に気づかれないように。

「でも、それじゃ明久君が濡れちゃうよ」

君を悲しませているのは僕かもしれないのに、君は僕の心配をする。

「いいんだ。僕は濡れるのは好きだから。

それに、瑞希ちゃんが風邪ひいちゃ困るからね」

偽りの優しさで君を騙す僕を許してほしい。

「うん。ありがとね」

だけど、君は僕の真意に気づくこともなく、疑うこともなく受け入れる。

僕はそれから雨の中で傘も無しに10分ほど待つ。そして十分に濡れたのを確認すると部屋に戻った。

「なんでこんなにずぶ濡れになるまで外にいたの!」

これが建物に戻った僕に一番最初にかけられた言葉だった。

「濡れるのが好きだから……」

ただ、正直に理由を話す気にはなれない。だって、これ以上は君に迷惑をかけたくないから。

「もう、明久君って子は……
今すぐ、保険室に行って着替えてきなさい」

「はい」

いまだに服から雨水が滴る服を着て保険室に向かう。当然、廊下は水浸しだ。

「放課後に服を取りに来るのよ」

「はい」

保険室で体育着に着替えた僕は保険室を出る。

あーあ、廊下の乾拭きしなきゃだな……

自ら招いた惨事なのだが、頭が痛くなる。おそらく、掃除の時間の2倍は掃除をしなければならぬだろう。そう思い、渡り廊下に差し掛かる角を曲がると何かにぶつかつた。

「つおと！」

「きゃあ！」

しりもちをついた状態で見上げれば雑巾を持った君がいた。更に廊下の奥を見れば僕の残していった雨水は露程も残っていなかった。それは君が僕の代わりに廊下を拭いてくれたことを意味するわけで。

「乾拭きありがとね、瑞希ちゃん」

「明久君の方こそ、なくしものを探してくれてありがとございませぬ」

君は乾拭きをする必要なんかどこにもないのに、それをなにも気にしていないように笑う。だけど、それは僕の胸を苦しめる結果となる。

「うん。はい、瑞希ちゃんの髪飾り」

ポケットから君の探し物を渡す。君はそれを受け取ると、安堵したように目をつぶり、それを両手で掴む。

それは、それだけ君がそれを大切にしていたという証拠。

僕はそれをすぐに君へ渡さなかった。

僕のがままで……

「瑞希ちゃん、乾拭きは僕がやっておくから大丈夫だよ。ありがとね」

そう言って、君から雑巾を受け取るうとするけど君は離してくれない。今思えば、昔からこういった意思の強い部分が垣間見えていたのかもしれない。

「乾拭きなら私だけでもできます」

「いって。僕がやるからさ」

「よくなんかありません」

ムキになって二人で一つの雑巾を引っ張りあう。だけど、力のない君はすぐに体勢を崩してしまふ。僕はそれを受け止めようとすけれど、引っ張る力と同じ方向へ動いてしまったために二人して転んでしまふ。

それも、転んだ足下には水をはったバケツがあつて

バシヤアアア

「うわっ!?!」

「きゃあ!?!」

案の定、二人してずぶ濡れだ。しかも僕に至っては本日二度目である。

「ごめんみず　　つぶ、あははは」

水に濡れた君の髪がベツトリと顔に張り付いていて思わず笑つてしまふ。いつもみたいなのやわらかな髪質から一転しているのだから、そのギャップは相当なものだ。

「もう、明久君笑わないでください!」

頬を膨らまして怒つたように言う君の顔はどこかで見覚えがあつた。そう、確か昨日も似たようなことが……

「あはは、ごめんごめん。瑞希ちゃんの髪がワカメみたいでつい…」

だけれども夢は僕に思い出す時間もくれずに進み続ける。

「そういう明久君だって相当なものです！」

いまだに膨れっ面な君をなだめようと話題を変えることにする。

「ほんと悪かったよ……」

それより、これどうしようか……?」

眼前にはさっき倒したせいで水浸しになった廊下が広がっている。

「一緒に乾拭きしますか？」

「うん、そうしようか」

さつきまで、どちらが乾拭きをするかでもめていたのに、今はこんなにもすんなりと解決した。いったい僕らは何をそんなに意地になつていたのでろう？

こんなにも簡単な解決策があるのに言い争いをしていたなんて、なんてバカらしくて、なんて純粹だったんだろう。

きつともうあの時のようには戻れない。

僕が君のことを意識しすぎてしまうから。

僕が純粹なままの僕じゃないから。

だから僕は君にふさわしくないんだ。

こんなにも汚れてしまったから。

「ごめん姫路さん……」

自分の眩きで目が覚める。

きつとあんな昔の夢を見たのも昨日の出来事があったからだ。あんな淡い期待を抱くような事があったからだ。

解りきっているはずなのに、諦めたはずなのに……

いつまでも捨てられないんだ……

君が僕に期待を持たせるから……

外を見ればしとすと雨が降っている。今日は縁日で学校は休みだけれど着替えくらいはしておこう。

そう思い、なにげなくポケットに手を入れると、指先がなにかに触れる。それを取り出してみれば、それはあのウサギの髪飾りだった。そういえば昨日、返しそびれたんだった。

着替えをそうそうに終えると、玄関へ向かう。

「アキくん、どこへ行くのですか？」

居間でパソコンの仕事をしている姉さんが僕を呼び止める。

「ちょっとそこまで用があるから行ってくるよ」

姉さんと話しているとなにかと長くなってしまうので、適当にながしておく。

「まったくアキくんは……」

そういえば、アキくんが私服と体育着の両方をずぶ濡れにさせて帰ってきた日もこんな雨の日でしたねえ……」

僕は雨の中、ひたすら走った。傘は学校に置き傘をしているため、持っていない。

姫路さんと僕の家との距離はそこまで離れている訳じゃないけど、雨の中を走っていくのは中々辛いものだ。

ざああああー

走っている最中、雨脚が強くなってきた。僕は頭を下げると、なるべく目に雨水が入らないように走る。

雨に濡れていると今日の夢の事もあってか、あの日の事が思い出される。

あの時は偶然、見つけた髪飾りを届けようとしただけだった。

だけど姫路さんが髪飾りを探していると知った時、素直に渡そうとする気持ちは消えてしまった。

姫路さんに優しいと思われたために、わざと濡れてから戻った。

だけど、今回は素直に返そうと思う。

じゃないと、いつまでも踏ん切りがつかない気がするんだ。

だから、これで僕の初恋とも「うわっ!？」

雨で滑りやすくなっていたためか、はたまた考えにふけていたからなのか分からないが、転んでしまった。

そして転んだはずみに、右手に持っていた髪飾りを手放してしまう。それは宙を舞い、空き地の草むらの中に入ってしまった。

僕は急いで空き地に入ると髪飾りを探し始める。けれども、草むらの中をいくら探しても見つからない。

雨脚は更に強くなり、正に豪雨といわんばかりの勢いになってきた。

まるで、僕に諦めて帰れと言ってるみたいじゃないか。

まるで、姫路さんの事を諦めるなって言ってるみたいじゃないか。

まるで、僕の初恋を応援してくれるみたいじゃないか。

そう都合のいい解釈をし、涙が出てくる。

都合のいい解釈だっかわかっている。だけど、このタイミングで、髪飾りを返して踏ん切りをつけようと思ったこのタイミングでこんな事がおきるなんて期待したくなるじゃないか。

雨がこんなにも強く……？

あれ？

気づくと僕の背中には雨が当たっていなかった。不思議に思い、前を見回すが相変わらずの豪雨だった。そう、僕のところだけ雨が降っていないような

「明久君、風邪ひいちゃいますよ?」

後ろから聞こえてきたやわらかな声に振り向くとそこには

「姫路さん、なんでここに!？」

傘をさした姫路さんがいた。

「それはこっちの台詞です。明久君こそ、こんな大雨のなかどうしたんですか?」

姫路さんは傘の比重をこちらに傾けているせいか、左半分が濡れてしまっている。

「その、なくしものをしちゃってね」

さすがに姫路さんの髪飾りをなくしたただなんて言えないので、ぼやかして言う。

「もしかしてなくしものって、これですか?」

そう言っつて、姫路さんは僕のすぐそばにかがみこんで何かを手にする。

姫路さんは笑いながら僕にそれを見せてくる。

それは僕がどんなに探しても見つからなかった、あの髪飾りだった。

「明久君、灯台もと暗しってことわざ知ってますか？」

いくら僕でもそれくらいは知っている。

「自分の近くにあると、どんなに大切なものでも気がつけないってことですよ」

なぜだか姫路さんのその言葉は僕の中に染み渡っていった。

僕は姫路さんと幼いころから一緒だった。

僕が姫路さんに恋心を抱いたのはいつからかはわからない。

だけど、僕にとって姫路さんが大切な人であることは心のどこかで理解していたと思う。

だから姫路さんのためなら頑張れた。

姫路さんを助けたくて頑張れた。

姫路さんに笑ってほしくて頑張れた。

姫路さんを傷つけたやつらを許せなくて頑張った。

姫路さんの努力を無駄にしたくなくて頑張れた。

なら、もう少し自分の気持ちのために頑張ってもいいんじゃないだろうか。

今度は姫路さんのためになんてかっこつけずに、僕自身のために頑

張ってもいいんじゃないだろうか。

「姫路さん、ありがとう」

姫路さんの手から髪飾りを受けると姫路さんにつけてあげる。

「明久君の方こそ、私のためにこんな雨の中ありがとうございます
ね」

心底嬉しそうに笑う姫路さんの笑顔を見て思う。

ああ、やっぱり僕は諦めれそうにない

(後書き)

作者のとんでもない過去捏造 + 妄想にお付き合いいただきありがとうございます。
うございます。

もうなんと言いますが、この二人が最高すぎてできてしまったもの
なので、生暖かい目でご覧になっていただいてかまいません。

ただ、一言いいたいことは明瑞最高！

これにつきます。

それと作者はアンチ美波ではありません。

むしろバカテスにとって美波は必要ですし、キャラ的にもいいキャラ
ラだと思っています。

けれど、明久とくつつけるのならやっぱり姫路さんになってしま
います。美波ファンの方、すいません

では、よろしかったら感想・評価のほどよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3786u/>

僕と君と過去の思い出

2011年9月10日18時57分発行